

# 色弱・色覚異常・色盲・色覚障害はどう違う？

## ~~色盲~~

色盲という言葉は、誤解や差別を招きやすいので、現在は使われなくなりました。

## 色覚異常

眼科で使われています。

## 色覚障害者

行政が使用している言葉です。

## 色弱者

色の配慮が不十分な社会において、色のコミュニケーションの弱者の立場であるという意味で、「カラーユニバーサルデザイン機構(CUDO)」が提唱しています。

## 「色盲」「異常」

などの言葉は、誤解・理解不足による偏見を招き、差別の対象となりかねません。

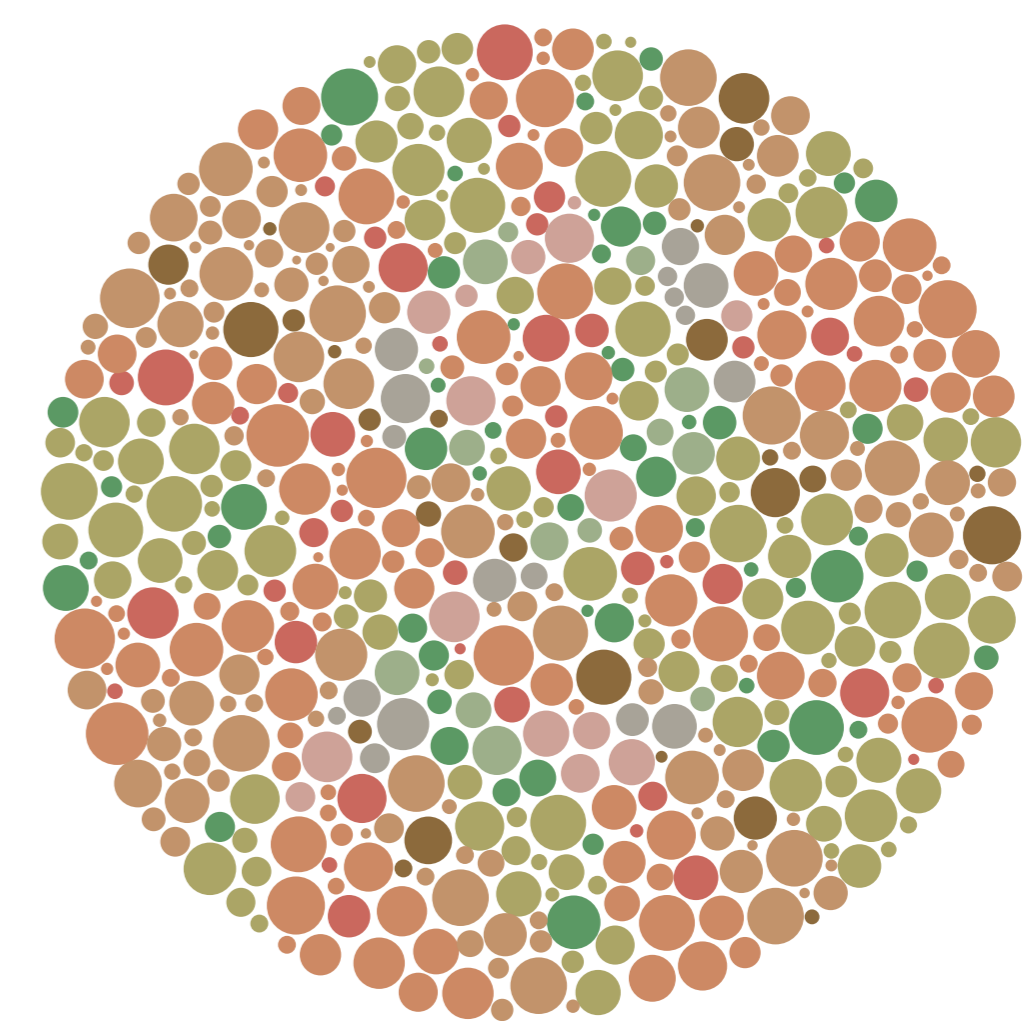
色の見え方には、個人差がありますが、これまで多数派の人が、少数派の人に対して使われて来た言葉が「色盲」「色覚異常」「色覚障害」という呼び方です。

かつて日本の学校で【一斉】に実施されていた「色覚検査」で、「色覚異常」と診断された人の「色の見え方」が「色弱」です。

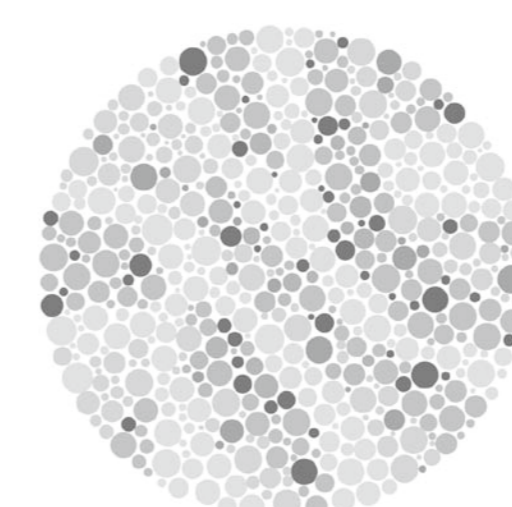
この「色覚【一斉】検査」は、誤解や偏見を招き、差別の原因となるという理由で、2002年を最後に行われていません。

日本眼科医会は、2013年の調査で色弱の子どもの半数が、検査を受けていないがために、気づかぬまま進学・就職時期を迎え、その6人に1人が進路の断念などのトラブルを経験していることが分かったことから、「『希望者には』小学校低学年と中学1・2年で検査を実施するのが望ましい」と訴えています。

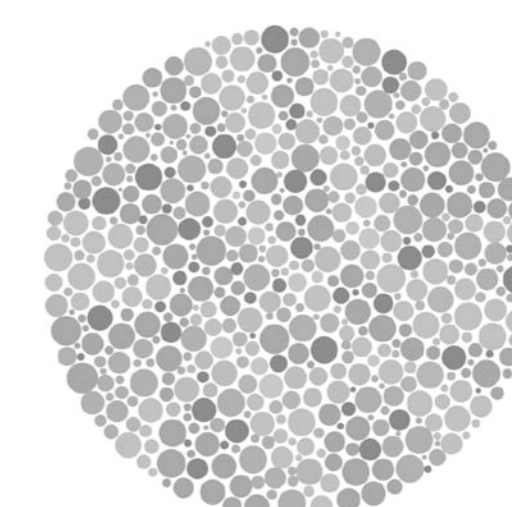
## この模様を覚えていますか？



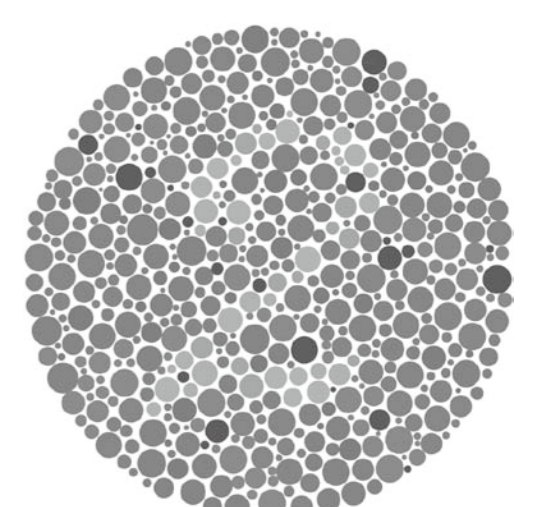
▲石原式仮性同色検査表(はんだや・金原出版)



▲赤チャンネル



▲緑チャンネル



▲青チャンネル

一般色覚の人には読めないが、「色弱者」には「2」という数字が読めるという図版で、色弱の方が見分けるのが得意な領域の色を上手に使った検査表です。

出典:ハート出版「CUD」